

明治21年4月10日、東京に仮本部を置いたかたちで「神道直轄天理教会」が公認された。公認を得ていなかったために、おぢばでは巡査がお屋敷の門前に立っていた。初代真柱が不在の中、おぢばで留守を守る増野正兵衛たちにとっても、公認は大きな出来事であっただろう。本部設置に際して、正兵衛は「会計兼派出」として名を連ねている。この頃の増野家の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治21年5月6日(陰暦3月26日)午前8時:増野正兵衛伺(四日前より左の歯浮き、陰暦二十四日夜より俄に寒気して縛られる様になり、一度願い、速におたすけを頂き、それより何となく身しんどうてならず、二十五日十二時よりおぢばへ出でおたすけを頂き、それより又目かい口のはたへ出物出たるに付伺)
- ・5月8日(陰暦3月28日)夜:増野正兵衛前さしづにより、所々御話を伝えるには、播州地方へも参りまして宜しきや伺/同日同夜、増野正兵衛口端出物喉痛みに付伺
- ・5月21日午後4時:増野正兵衛身上播州より帰りの願
- ・5月22日(陰暦4月12日):増野正兵衛鼻の奥、左胸腹の下出物出来、胸むかつき気分悪しく身上障りに付伺
- ・5月23日(陰暦4月13日):中山会長初め諸取次方より東京本部へ行ってくれとの事に付、増野正兵衛東京行伺
- ・5月24日:増野正兵衛おぢば出発の伺/本席龍田村まで御送り伺/同榊井伊三郎本席御供見送り願

明治21年5月6日、増野正兵衛は、自身の身の障りについて伺っている。割書きを見ると症状は複合的であり、歯が浮いたり、身体がしんどくなったり、また目の痒みや口に出来物が出るようになった。「軽い道、何でもない道修理肥道、神一条一つ話、長らく一寸通り難い道を連れて通る」と、世間から見ると通ることが難しいような神一条の道を、それでもやはり通るようにと諭されている。口の障りについては、3カ月前の2月21日にも伺っており、家内の状況に対して「実りある日を楽しみに真実の種を蒔くように」と諭されていた。どちらの「おさしづ」にも「世上」や「世界の道」という言葉が多く、家内の者たちが神一条の道よりも世界の道を立てている状況を述べていると考えられる。

その2日後の5月8日、巡査が平服で「神の道」を質問しに来た。その後「おさしづ」を伺うと、「近くから話聞きたい者へは諭してやるがよい。遙々運んでやるがよい」というお言葉があり、それを受けて正兵衛は、その夜に「所々御話を伝えるには、播州地方へも参りまして宜しきや」と伺っている。「どんな事も急えてはいかん、時々旬々道」というお言葉があり、まずは身の周りの者から神の話を十分聞き分けるように諭されている。その後、同じ夜に、口の周りの出来物と喉の痛みについて再び伺うと、「案じる事は要らん。たゞ世界処、それへ早く理を治めくれるようへ」と説かれている。「理を治める」

とは、神一条の道に踏み出し切れない家内の事情のことについて言われているのであろう。

正兵衛は、それからしばらく播州(神戸地方)に戻っていたが、2週間ほど経った5月21日、身上の障りがひどくなったのか、おぢばに帰ってきて「おさしづ」を仰いでいる。まず「身上に一つ障りあり、先々は治まりてある」と、将来の治まりについてふれられた後、「世界の道は通り、通り難い神の道は内、表と裏との道である。内に運ぶ人が少のうてならん。これをよく、世上にやないで、心に定めてくれねばならん」と諭されている。5月6日の「おさしづ」と表現は異なるものの、言わんとすることはほぼ同じといえよう。

次の日(5月22日)、正兵衛は、今度は「鼻の奥、左胸腹の下」の出来物と、「胸むかつき気分悪しく」について神意を伺った。「さあ先々勤め、内々一つ事情、いかなる話、先々という処、安心皆安心定め」と、先々のことをよく考えて、みんなが「安心」できるように心を定めるようにと諭されている。

この頃、正兵衛は、初代真柱から交替として東京の仮本部に行くようにと命を受けていた。伺うと「さあへ〜当分処々々々あちら勤め、互いへの勤めやい」と許された。東京出発に際して「替わり入れ替わり、心置き無う、安心心定め、内々安心、潔ぎよう速やか心の心定め」と、東京に行くことと内々の「安心」について述べられている。正兵衛は、家内のことが気にかかっていたのだろう。東京行きについて「潔ぎよう速やか心の心定め」という言葉が印象的である。割書きを見ると、本席が龍田村まで見送りに来たようである。

「鼻」「胸」

さて、5月22日の「おさしづ」は、『身上さとし』では「鼻」と「胸」の二つの項目で用いられている。まず「鼻」では「先案じせず、家内の者が皆安心して、お道の上につとめる心を定めよ」という意味で、鼻の奥の障りは、先案じをしてはならぬと指示されたのであろう」と述べられており、また、「胸」では「これから将来安心である。家内の者皆安心せよ。どういふ処に移転するのも天の理と納得がついたら、懸案の事を親神様が治めるであろう。という意味で、胸のむかつくのは、理をよく納得せよということを示されたのであろう」と記されている。

このように『身上さとし』の典型的な説明としては「鼻=先案じしないように」、「胸=理をよく納得せよ」という指示として捉えられているが、増野家の文脈でいえば(「口」も含めて)おぢば移転に向けた家内の者の心定めについて言われていると考えられる。特に、神戸という繁華な町で世上に流されやすい中、神一条の道に踏み出し、「先々を見据えた安心」を持つことが肝要といえる。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、84頁。

(2) 同書、153頁。